

附論 中山錦川遺跡周辺の戦時関連施設 － 6号道路遺構を中心として－

藤崎 正人

1 はじめに

中山錦川遺跡は有明海の海岸線から離れた台地上に位置している。こうした地理的条件を活かして造られたのが隈庄飛行場である。附論ではあるが、ここでは隈庄飛行場を通して戦時下の中山錦川遺跡周辺について考察を加えてみたい。また、関連する施設として大刀洗飛行場についても併せて述べておきたい。なお、隈庄飛行場の範囲については、施設主要部を配した舞原台地に、本報告に準じて中山錦川遺跡の存する乙女台地を併せた。また、付属施設の写真については、現存する遺構を除いては大刀洗飛行場及び菊池飛行場のものを用いた。

2 隈庄飛行場

昭和13年頃、大日本帝国陸軍第六師団により施工、設計され、杉上・隈庄・豊田（現熊本市南区城南町）・乙女（現上益城郡甲佐町）に跨る台地に昭和14年9月に建設が始まり、昭和16年10月頃完成した。この間、昭和16年6月に隈庄教育隊がおかれると、戦闘分科の操縦士教育機関であった大刀洗陸軍飛行学校へ入る前段階として、九五式中等練習機（キ―17）や九九式高等練習機（キ―55）等で離発着の訓練を行っていた。同年10月、飛行場の完成とほぼ同じ頃に分教所としての活動を開始した。正式名称は「大刀洗陸軍飛行学校隈庄分教所」で、日中戦争勃発による陸軍の操縦者不足を解消する目的で先に開設された大刀洗陸軍飛行学校の分教所として発足した。

後に戦局の激化により全国の教育隊が統合され、「練習飛行隊」として再編成、軍隊化されるようになると。隈庄教育隊は第九練習飛行隊（九練飛）に編入、その後蔚山へ移駐した。さらに、隈庄飛行場には沖縄戦が行われていた昭和20年4月、第六航空軍隷下の飛行第百十戦隊が移駐し、警備隊や補給隊、整備隊も加わった。

以降の隈庄飛行場は、ほぼ同時期に熊本（健軍）飛行場へ移駐した義烈空挺隊等と共に沖縄戦線や知覧飛行場へ向かう特別攻撃隊の中継基地として利用されるようになった。飛行場開設当初の滑走路は飛行学校入校前の基礎訓練を行うための施設であったことから、練習機や戦闘機の離着陸に十分な1600mであったが、四式重爆撃機「飛龍」18機、2個中隊で編成された飛行第百十戦隊移駐後は2500mへと延伸する工事が行われた。これにより搭乗員のみを乗せて熊本飛行場等で装備を行うという手間を省き、直接隈庄飛行場より出撃することが可能になったが、終戦を経て、陸軍諸学校分教所臨時設置令廃止（昭和20年11月26日省令56号）により正式に廃止された。

ちなみに本飛行場は終戦近くの昭和20年当時、後の俳優三船敏郎が写真班員として所属し、終戦を迎えたことでも知られている。

3 大刀洗飛行場

大正8年、陸軍が福岡県朝倉郡三輪村と馬田村、三井郡大刀洗村に跨る土地に建設し、昭和15年に菊池（花房）飛行場に移駐するまで陸軍の飛行第四聯隊（昭和13年飛行第四戦隊に改称）が駐留した。昭和14年7月に基本操縦学校の新設が計画され、基本操縦学校として

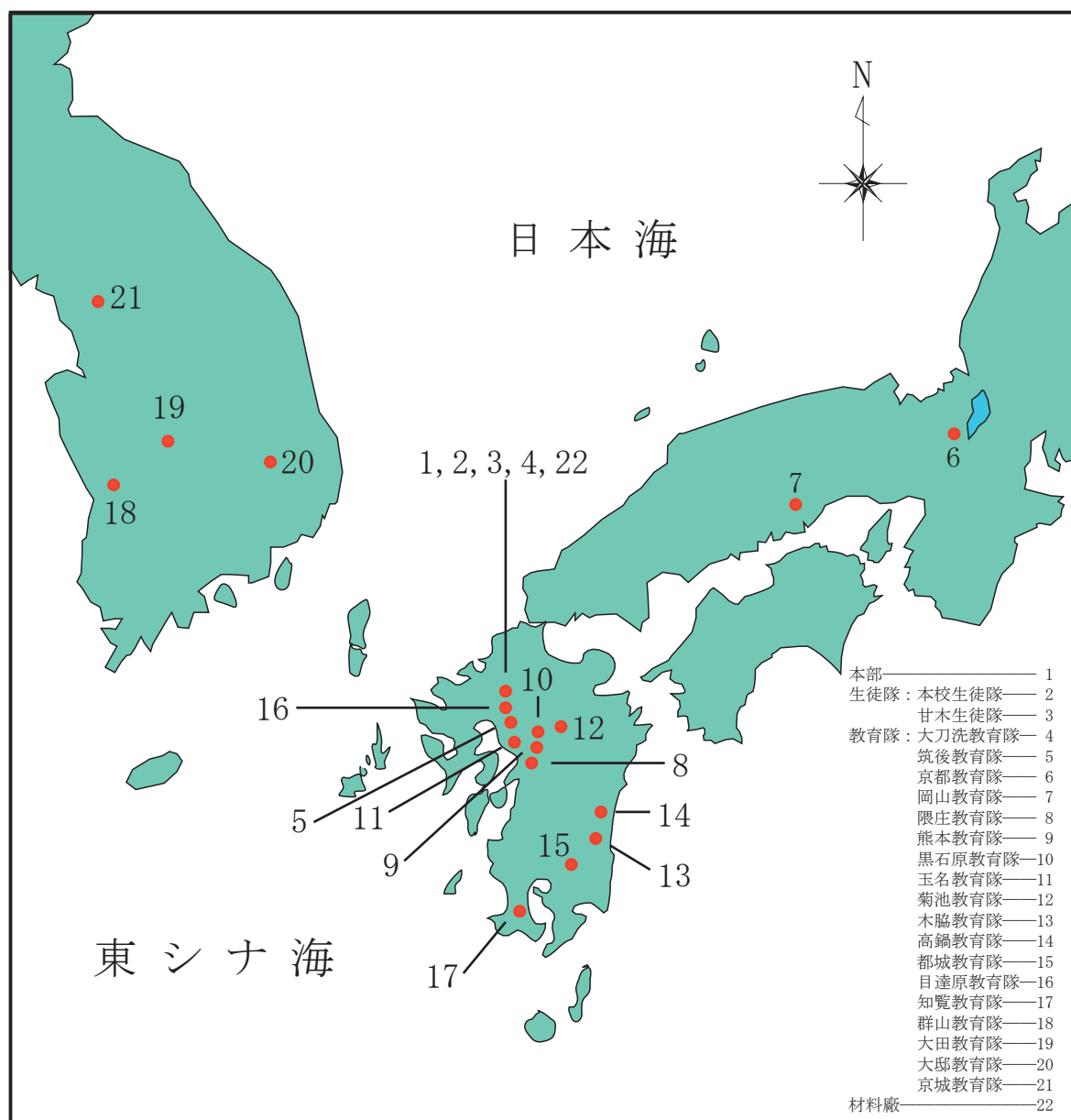
- ・下館陸軍飛行学校―下館飛行場
- ・菊池陸軍飛行学校―菊池飛行場
- ・大阪陸軍飛行学校―盾津飛行場

の新設を計画していたが、昭和 15 年には以下の形態で施行・設立された。

- ・下館校—宇都宮陸軍飛行学校として設立
- ・菊池校—大刀洗陸軍飛行学校として設立
- ・大阪校—岐阜陸軍飛行学校として設立

新設計画の段階で大刀洗陸軍飛行学校は、菊池飛行場がその予定地とされたが、飛行第四戦隊が菊池に移駐したことと、その跡地として既存施設の利用が容易であったことから、大刀洗陸軍飛行学校令（昭和 15 年 9 月 13 日勅令 578 号）の制定を以て大刀洗陸軍飛行学校が設立された。

設立当初は熊谷陸軍飛行学校（昭和 10 年に陸軍が少年飛行兵養成を開始し、一手に担っていた）の分校であったが、分校から昇格する形で独立。後に熊谷陸軍飛行学校の分教所施設であった菊池、大邸を編入し、新田原（高鍋）を新たに分教所として発足させた。（昭和 15 年 陸密 2190 号「陸軍諸学校分教所ノ名称、位置ノ件。」）

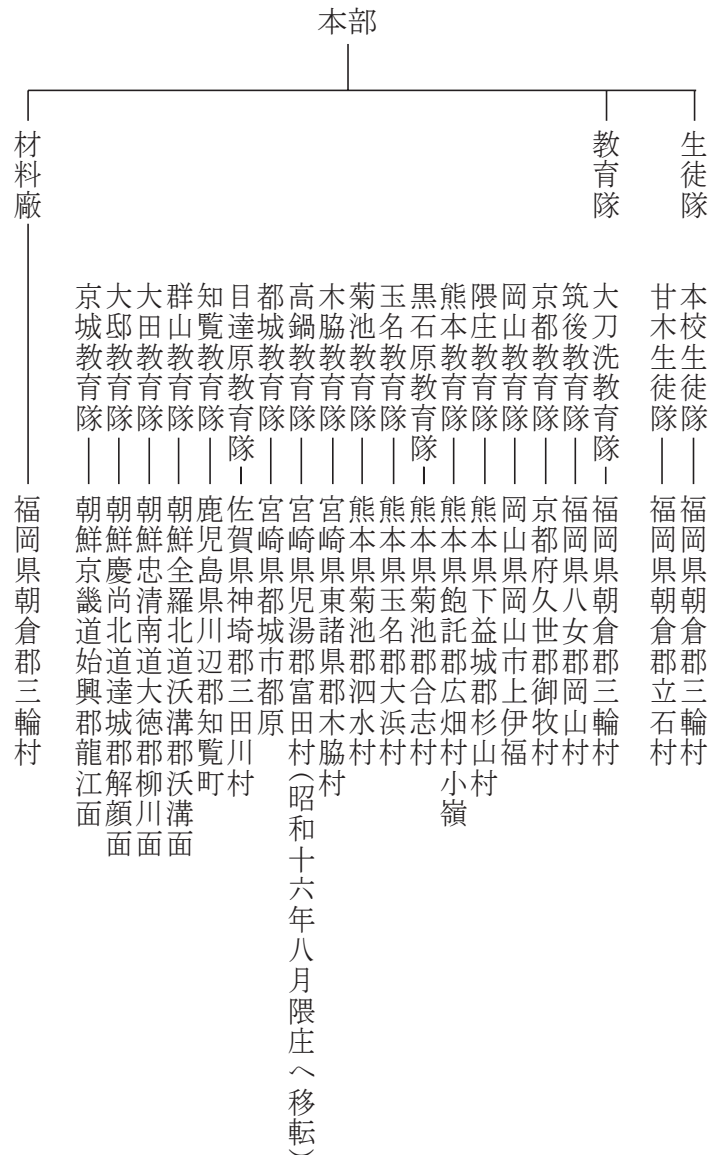


図一 476 大刀洗陸軍飛行学校（本校）及び各教育隊（分校）分布図

この時点で陸軍は基本校を三つとし、それぞれ以下とした。

- ・熊谷陸軍飛行学校——爆撃分科
- ・宇都宮陸軍飛行学校——偵察分科
- ・大刀洗陸軍飛行学校——戦闘分科

大刀洗陸軍飛行学校の組織及び所在地は以下の体制で、大刀洗は「本校」、各教育隊は「分校」と呼ばれ、関西以西と韓半島で操縦士養成の役目を担った。最終的には18の分校を有する組織となり、終戦までに全国の陸軍飛行士数約3分の2を養成したといわれる。



昭和20年2月、第51航空師団に編入後、大刀洗陸軍飛行学校は閉鎖。4月には「大刀洗陸軍飛行学校令」廃止により正式に廃止された。（昭和20年4月16日勅令228号「陸軍航空本部令外三勅令中改正等ノ件」）

4 戦時下の中山錦川遺跡周辺

限庄飛行場が舞原台地から乙女台地にかけて建設されたことは先述の通りであるが、本調査において、



西側格納庫前準備線のコンクリート舗装



兵営本部近くの「心字池」と名付けられた庭園の遺構



油脂庫若しくは火薬庫として使用されたコンクリート建物



米極東空軍撮影空中写真
日地セク証250122007号



滑走路及び兵営本部付近の遠景



中山錦川遺跡C地区(6号道路及び付属施設)付近

図一 477 極東米軍撮影の隈庄飛行場と現存する主な遺構



写真－429 大刀洗飛行場の有蓋掩体壕①



写真－430 大刀洗飛行場の有蓋掩体壕②



写真－431 菊池飛行場の営門跡



写真－432 菊池飛行場の格納庫基礎



写真－433 菊池飛行場の格納庫基礎（拡大）



写真－434 大型格納庫基礎

その関連を窺わせる掘込（コンクリート基礎）を調査8区において確認した。この北西側にある調査7区及び調査9区では、近代から現代にかけて使用されたと考えられる道路遺構（6号道路、本編図－431）を検出しており、今回確認した掘込がこの6号道路に並行する形で規則的に配されていたこと。また、現在の甲佐町府領から乙女小学校付近にかけて飛行場の誘導路や掩体壕が造られていたことなどから、想定される施設として掩体壕を想定したが、隈庄飛行場をはじめ、熊本飛行場や菊池飛行場に設けられた掩体壕は馬蹄形の盛り土を施した無蓋掩体壕であり、基礎を設けない無蓋掩体壕にはコンクリートを用いることは考えにくい。この点でコンクリートの基礎を埋設し、上部に半円状の覆いを造る有蓋掩体壕（写真－429及び430は大刀洗飛行場のもの）とは異なる。また、格納庫（写真－432、433、434いずれも菊池飛

行場のもの)は兵営本部が建てられた現在の城南病院付近にしか建設されていなかったことから、格納庫である可能性も低い。しかしながら、誘導路に沿う規則的な配置を見る限りでは、燃料や弾薬といった比較的小規模な物資を秘匿するための付属施設があった可能性は否定できない。

5 おわりに

本調査で検出した6号道路は、古代から主要な道路として利用され、染付の出土からも窺えるように近世以降も道路として利活用されていた。しかし、日中戦争勃発と共に舞原台地から乙女台地にかけての一带が戦時関連施設として拠点化されると、周辺道路は誘導路となり、6号道路もその1本として整備されていった。中山錦川遺跡周辺は誘導路をはじめ、掩体壕などの付属施設も多く造られた。海を隔てて中国大陸や韓半島に近いが内陸部であるという地理的特性からも、軍都として軍部が熊本を重要視していたことの一つの証左として捉えられる。戦後は飛行場敷地の多くが区画整理や民有への返還等によりその姿を大きく変え(図-478)、掩体壕をはじめとした各種施設は宅地や畑地へ、誘導路は跡地周辺の県道になった。このようにして往時をしのばせるものは消えつつある。しかし、舞原台地の西側には西海道駅路が推定され、球磨駅家跡もある。今回の道路遺構は性格を時代によって変えながらも、古代から現在に至るまで、この台地が要衝であるということを物語っている。今回取り上げた掘込も性格は不明ではあるが、隈庄飛行場とこの台地の関連性を解明する一つの手掛かりとなるのではないかと考える。

なお、附論作成にあたり、以下の方々に御教示いただきました。文末ながら記して感謝申し上げます。
北原勲(筑前町立大刀洗平和記念館) 岡本真也 馬場正弘 山下義満(熊本県教育委員会)

(順不同、敬称略)

引用・参考文献

- 十菱駿武 菊池実 2002 しらべる戦争遺跡の事典
- 熊本戦争遺跡研究会 2005 子どもと歩く戦争遺跡 熊本編 I
- 熊本県教育委員会 2006 大江遺跡群Ⅱ 熊本県文化財調査報告第231集
- 秦郁彦編 東京大学出版会 2005 日本陸海軍総合事典
- 立山ちづ子 2006 隈庄飛行場 工事の記録
- 福岡県筑前町 2009 筑前町立大刀洗平和祈念館 常設展示案内
- 福岡県筑前町 2010 大刀洗飛行場記録誌 証言 大刀洗飛行場
- 岡野允俊 1989 健軍三菱物語